

「すてきな住人」を表現し鑑賞する、タブレットの活用

熊本市立五福小学校 教諭 西尾 環
e-mail saibikan@gmail.com

キーワード：タブレット、図画工作、鑑賞、少人数グループ、対話、プレゼンテーション

1. はじめに

これは、小学校4年生の図画工作科の題材「ここにいるよ、すてきな住人」においてタブレット携帯端末(iPad)を活用した実践である。

この題材の主なねらいは、鑑賞能力の育成である。「身近な場所」に「その雰囲気から思い付いてつくった想像上の住人(キャラクター)」を置いて写真に撮り、それをお互いに見せ合い、形・色のよさや組合せの面白さを感じ取るとするものである。それと同時に、想像力を働かせて色・形などを工夫した紙粘土による立体物を作り、置き方を工夫するという表現力育成もねらいとしている。

タブレットの活用方法は、子どもが主にカメラ機能を使って作品の撮影をし、写真をスライドさせながらプレゼンをするというごく簡単な使い方である。しかし、タブレットを一人一台持ったことで、子どもは意欲的に造動し、鑑賞力や表現力が高まった。

2. 学校・学級の実態

五福小学校は、熊本市の中心部に位置し、地域の交流センターと併設されている。地域と一体化した教育が推進されているが、校舎内は狭く体を動かして活動できる場所が少ない。そのような中でも子どもが愛着を持っている場所はある。地下プール、遊び場となっている屋上、花鉢やプランターが並ぶ昇降口前のプロムナードなど、他校とは違った趣がある。

PC室はごく普通の部屋だが、学校全体としての活用度はそう高くはない。私が担任した4年2組24名の子どもたちもそれまでICT機器を扱った経験は少なかった。しかし国語でPCを使ったリーフレット作りでは実に意欲的に活動し、地域の方との交流が学習に生かされ、デジタルで成果物を作りあげた事に大きく満足した。その数ヶ月後に、子どもたちは教室で、タブレットと出会った。

3. 実践の目的・目標

本題材は、教科書においては、鑑賞場面を「デジタルテレビに映し出して教室で一人ずつ発表会をしましょう」という例が載っている。しかし私は少人数グループによる対話形式の鑑賞活動を取り入れた方がねらいにそったより効果的な活動ができると考えた。3人組程度の少人数にすることで、作品を手を持って近くで見たり話したりしやすく、互いに数多く発言できる。相手を変える事で変化に富んだ学習が可能である。つまり、言語活動が充実した能動的な鑑賞活動となり、豊かな交流活動が推進される。そしてそのような学習を成立させるには、各自がタブレットを手にすることが効果的であると考え、活用した。

4. 実践内容

4. 1 導入

「もし、ここに住人がいたとしたら？」とデジタルテレビに映し出された靴箱の写真を見て考えることか

らスタートする第1時の学習。「何だろう？ごきぶりかな？虫かな？」と子ども達は想像する。しかし、教師が示した紙粘土の住人(キャラクター)の写真に子ども達は思わず引きつけられる。「靴の形をしている！」「顔みたい。」「色が違う。何か意味があるの？」全員で鑑賞の学習をした後、学校内で自分の好きな場所を選び、自分が想像した好きな住人を紙粘土で作って置くことを知る。「楽しそう！」思わず関心が高まった。

そしてその鑑賞会をすることがこの学習のゴールと伝えた。「住人をずっとそこに置いておいていいの？みんなで見回すの？」と問う子どもに「いや、住人を君が選んだ場所においてこのタブレットで写真を撮るんだ。そしてこのようにみんなの作品を映し出せば、一緒に教室で鑑賞会ができるでしょう。」「やった！！」教師の言葉に子ども達のボルテージは益々上がった。



写真1 教師の参考作品
(くつ箱+住人)

4. 2 製作した写真を撮影

第2時は、子どもが校舎内から選んだ場所に合わせ、自分なりに住人を発想。色や形の意味を考えてアイデア図を描いた。3時・4時は紙粘土を使って教室で立体製作。白の紙粘土に色を練り込んで、自分の住人のことを楽しく説明しながら作っていた。

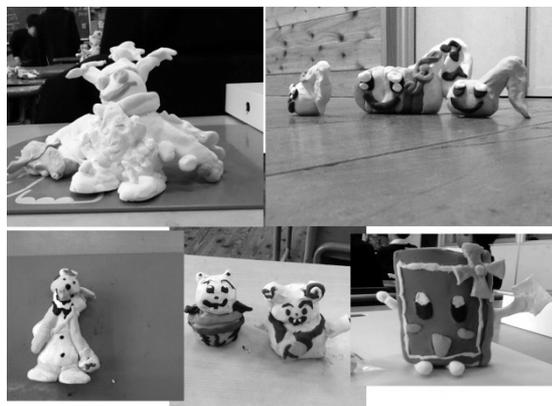


写真2 子どもたちが作った住人たち

第5時はいよいよ撮影である。それぞれが自分の住人(立体作品)とタブレットを持って校内に散らばっていった。「どこに置いたらいい？どのような角度で写せば面白い？」子どもは必死に考える。そして自然と友人と協力しあって撮影をしていた。「私のタブレットをちょっと持って。少し住人を動かすから。ありがとう。」「何枚か写しておこう。」「ねえねえ、こっちの写



真の方がいいよ。」
対話をしながら鑑賞もすでに始まっていた。

写真3 一人一人が住人を場所において撮影

4. 3 鑑賞会

最終の6時。それぞれが写してきた「場所+住人」の写真を作品として友達に見てもらい鑑賞活動である。教室で3人組を作って交代で作品鑑賞。発表会でなく相手から質問を受けたり感想をもらったりしながら対話をする。1枚だけでなく複数枚見せる児童もいる。互いに自然とタブレットに指が伸び、画面を拡大したりスライドさせたりしていた。相手を変えてさらに鑑賞会は続く。最後には、全員の作品を教師がひとまとめにしたスライドショーをタブレットからデジタルテレビに映し出して鑑賞。拍手と感動にあふれる中で、「すてきな住人」の学習は終了した。



映し出して鑑賞。拍手と感動にあふれる中で、「すてきな住人」の学習は終了した。

写真4 タブレット活用のプレゼンと鑑賞

4. 4 児童の変容

この学習終了後、「鑑賞の学習がとても楽しかった（4段階の4）」と答えた子どもが100%を示した。表現や発想の力についても、子ども自身の自己評価は高い結果となった。教師の評価でも、鑑賞力はもちろん、意欲・発想構想・技能とも、これまでにない力がついたといえよう。

表 鑑賞に対する意識の変化

鑑賞の学習は？（4段階評価）

授業後	とても楽しかった (とてもすき) 100%		
授業前	とてもすき 60%	まあまあすき 32%	あまりすきじゃない 4%
			さらい 4%

5. 成果

一人一人がタブレットを持つことで、児童が常に自分の課題と向き合って学習できた。作品を置いて撮影しては確かめ、形や色のよさを生かそうと場所と住人

の組み合わせた置き方や写し方を工夫していた。個々の撮影であっても、「置く+撮る」という活動があるゆえに、自然と友人との関わりが生まれていた。そこには互いのアドバイスや賞賛もあった。

また、撮影・表現の見直し・作品選び・作品鑑賞、どれもが時間的に無駄がなく、意欲が持続した。時間内に全員の作品が完成することも図画工作科では大切なことである。

さらに、少人数の鑑賞会でのタブレット活用は、近くで自他の作品を見られることがよかった。拡大して見たいところを焦点化させたり、頭をつきあわせて形や色の組み合わせのよさや面白さについて共に考えたりすることができた。うまく発言できない児童でも安心して鑑賞活動に参加できた。少人数の素早い座席交代は授業がテンポよく進んだ。ラストの全体での作品スライドショーは、互いの作品を見ながら「あ、これは〇〇君のだ」「写し方がいい」など即座に評価する声も発せられた。普段から互いの作品をよく見ていたのだろう。学習の軌跡を振り返り、大きな満足感を得る場となった。授業のたびに記入した自己評価や振り返りには児童の学びへの喜びが多く見られ、学習終了後の「鑑賞」に対する児童の評価もの変容は大きな成果である。



写真5 作品「図書館のすてきな住人たち」

6. 今後に向けて

子どもの中には4コマ風の組写真や、アニメーション風に少しずつ変化させた連続写真を生み出した児童もいた。アルバム機能をうまく活用し、必要な写真を効果的に並べまとめておいたのだ。この発想は、5年図画工作のアニメーション作りにつながっていく。

今回はタブレット借用という形での実践であったが、タブレットの授業での活用が、図画工作科においても効果的であることが明らかになった。一日も早く学校にも整備されることを期待したい。



写真6 アニメーション的な作品の誕生